

もくじ

I にゆうきょしや 入居者がグループホームを^{ひょうか}評価する 2

II グループホームのいいところ、^{こま}困るところを みんなに^{つた}伝えたい 8

III ^{ひょうめん}表面だけ^み見て^{はんだん}判断しないで 16

IV ^{わたし}私たちがこれからやりたいこと 18

V わたしたちの^{ゆめ}夢 18

^{かいせつ}解説 20

アンケート

^{とうじしや}当事者および^{だいさんしや}第三者が^{かくにん}確認するための^{ひょう}ききとり表

まえがき

このパンフレットは障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会の入居者委員会が、独立行政法人福祉医療機構の助成を得て行った「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」の結果をまとめたものです。前半の27枚のスライドは入居者委員会が作成しました。DVDでは語りきれなかったたくさんの「本音」が盛り込まれています。各頁の「解説」およびパンフレット後半の研究報告は入居者委員会の活動をサポートした支援者がまとめました。



I

にゅうきょしゃ

入居者がグループホームを評価する

ひょうか

わたし

1. 私たちのテーマ

にゅうきょしゃ

入居者によるグループホーム

ひょうかきじゅん

さくせい

評価基準の作成



2

I

入居者がグループホームを評価する

2. 全国に暮らしやすいグループホームを ふやしてゆきたい…活動の目的

- グループホームにとって大切なことを、入居者の立場からあきらかにする
- この研究を通して、暮らしやすいグループホームを全国にふやしてゆく



I

入居者がグループホームを評価する

3. グループホームをたずね、入居者に会う …活動の進め方

- 各地^{かくち}のグループホーム^{ほうもん}を訪問する
- 各地^{かくち}の入居者^{にゅうきょしゃ}と話し合^{はな あ}う
- 各地^{かくち}の入居者代表^{にゅうきょしゃだいひょう}をまねいて話しあ^{はな}われた問題^{もんだい}をふかめる
- 問題^{もんだい}をせいりし入居者委員会^{にゅうきょしゃいいんかい}のまとめをつくる
- 報告書^{ほうこくしょ}やスライドをつくる
- 学会^{がっかい}などで報告^{ほうこく}する

解 説

「よい靴かどうかは、それを履いた人が一番よくわかる」ということがいわれます。グループホームも同じです。「このグループホームは暮らしやすいですか?」「どんなところをどう直したらよいですか?」という問いに答えられるのは入居者自身です。

グループホームの評価が第三者委員会などによって広く行われるようになりました。これは大変重要なことです。しかし、その評価の基準はあくまでも入居者自身の立場に立つものでなければなりません。障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会が「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」に取り組んだのはこのためです。なんとと言ってもグループホームは入居者の家なのですから。

4. 私たちがやりたかったこと

暮らしをもっと楽しく自由にしたい

- いろいろなグループホームのことを知りたい
- いろいろな仲間（グループホーム入居者）の生活を知りたい
- グループホームのことだけでなく、地域の状況やその地域の支援のあり方を知りたい
- それらを参考にして、自分たちの暮らしについて考えて、自分の暮らしをもっと楽しく、自由なものにしたい
- 仲間をふやしたい

4. 私たちがやりたかったこと

いろいろなグループホームのことを知りたい

- どんなグループホームがあるのか、どんな人がいるのか
- 他のグループホームではどんな支援がされているのか
- 自分のグループホームと他のグループホームのちがいはどんなところか



I

入居者がグループホームを評価する

4. 私たちがやりたかったこと

 な か ま せいかつ し
 仲間の生活を知りたい

- な か ま いっしょ
 仲間と一緒にうまくやっているか
 ○ グループホームに入る前はどこにいたか
 ○ し こと
 仕事のこと
 ○ や ちん
 家賃のこと
 ○ き ゅう ょう
 給料のこと



解 説

この研究を行ったのはグループホームで暮らす人たちで構成する「入居者委員会」、いうまでもなく障害当事者です。最初にぶつかったのは、入居者が他のグループホームのこと、またそこで暮らす仲間の生活についてほとんど何も知らないということでした。グループホームの運営者やスタッフには研修会などで他のグループホームの状況について知る機会や手段がそれなりに用意されています。しかし、そうしたチャンスは入居者にはほとんどないのです。入居者委員会は次のように決めました。「暮らしをもっと楽しく自由にするために、まず他のグループホームの事を知ろう。そのためによそのグループホームたずねてみよう。そして入居者同士で交流し話し合おう」。

4. 私たちがやりたかったこと

グループホームだけでなく

支援や地域の状況について知りたい

- 病気になったときやグループホームを出なければならなくなるとき、どんな支援をしてもらえるか
- 自分の暮らしとのちがい、地域の特徴、物価など……
住みやすいところかどうか
- 地域とどのように支えあっているか、支えあう人と人とのつながりがあるか

4. 私たちがやりたかったこと

暮らし、生活ってなんだろうということを一緒に考えたい

- いろいろなグループホームの暮らし方の違いを知り、自分たちはどうすればいいか考える
- 暮らし・生活って何だろうということを一緒に考える
- あたえられた暮らしではなく、もっと自分から提案していきたい



I

入居者がグループホームを評価する

4. 私たちがやりたかったこと

な か ま

仲間をふやしたい

- ^{とも}友だちをつくりたい
- これからずっとつきあいたい



解 説

入居者にとってグループホームは単なる制度や支援つきの建物ではありません。大切なのはそこで暮らす自分や仲間の生活そのものです。だから他のグループホームを訪ね交流する中で「暮らし、生活ってなんだろうということと一緒に考えよう。」と入居者委員会は考えました。入居者にとって、グループホームについて考えることは自分や仲間の生活を考えることとぴったり重なるのです。だからグループホームの生活や支援の様子をくわしく知り、グループホームの生活を一方的に与えられるものから自分たちで提案しつつってゆくものに変えようと思うのです。そのためにたくさんのグループホームを訪問し、入居者と話し合い、友達になってずっと付き合ってゆきたいと願うのです。

わたし 5. 私たちがやったこと

支援者がいないところで話し合いたかった

- 全国の8地域——札幌・盛岡・因島・静内・山形・大阪・いわき・群馬——
に行き、その地域の入居者と交流し、グループホームや自分の暮らしに
ついて話し合った
- 合計30以上のグループホームを訪問し、交流会を開き、300人以上の
入居者と話し合った。支援者には出来るだけ入らないようにしてもらった
- 各年度の終わりに、訪問先の入居者代表をまねいて交流会を開き、訪問
したときに感じたことなどについて討議した
- その後まとめた検討会を開き、わかったことを自分たちの言葉でまとめ、
報告書を作った
- パワーポイントをつくり、学会などで報告した

II

グループホームのいいところ、 こま 困るところをみんなに伝えたい

- (1) グループホームにはこんないいところがある
- (2) グループホームのこんなところが困る
- (3) 世話人についてはこう思う
- (4) 仲間との関係についてはこう思う
- (5) 将来についてこんな希望や不安がある
- (6) いま私たちが切実に感じていること



Ⅱ グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(1) グループホームのいいところ

人がいる安心感、そして自由

- ^{こま}困ったとき ^{そうだん}相談したり ^{たす}助けてくれる ^{ひと}人がいる…
つきあっている ^{とも}友だち・ ^{せわにん}世話人・ ^{しえん}支援センターの ^{ひと}人など
- ^{じぶん}自分の ^{へや}部屋がある
- ^{しせつ}施設とくらべて ^{まも}プライバシーを守りやすい
- ^か買い物や ^{もの}外出に ^{がいしゅつ}自由に行ける
- ^{こうどう}行動の ^{じゆう}自由がある
- ^{にんすう}少ない人数でくらせる
- ^{ひと}人がいる ^{あんしんかん}安心感がある
- ^{しょくじ}食事が ^{あんしん}安心



解説

3年の間に8地方約30のグループホームを訪ねました。入居者委員が一番関心を寄せたのは、カップルで暮らすグループホームです。

こういう支援があれば自分も結婚できると感じた人が何人もいました。急な階段、プライバシーが守れない部屋のづくり、過保護すぎるケアのあり方などには批判が集中しました。

入居者との話し合いの席に、そのホームの援助者や出身施設などの職員が同席することは、できるだけ避けるというのが入居者委員会の姿勢でした。ピアな関係の中で気兼ねなく本音で語り合おうとしたのです。

(2) グループホームの^{こま}困るところ

ホームをえらべない

- ホームをえらべない。^{はい}入りたいときにすぐ^{はい}入れない
- グループホームに^{つか}使える^{たても}建物^{すく}が少ない
- 場所によっては家賃^{ぼしよ}が^{やちん}とても^{たか}高い
- 世話^{せわ}人^{にん}になる人^{ひと}が^{すく}少ない。すぐやめる
- 入居者^{にゅうきょしや}同士^{どうし}の問題^{もんだい}で^{こま}困ることがある
- 収入^{しゅうにゅう}が^た足りない
- 相談^{そうだん}できる人^{ひと}が^{すく}少ない いない
- プライバシー^へが^{おと}守^{まも}れない（カギがつけられなかったり、となりの部屋の音^{おと}が聞こえる）

(3) 世話^{せわ}人^{にん}について^{おも}こう思う

もっと勉強^{べんきょう}してほしい

- 一番^{いちばん}身近^{みじか}な世話^{せわ}人^{にん}と関係^{かんけい}をつくるのは時間^{じかん}がかかる。だからすぐやめてほしくない。でも世話^{せわ}人^{にん}だけでなく他^{ほか}の人^{ひと}も私たち^さを支^さえてほしい
- なれた世話^{せわ}人^{にん}がやめるのは困る。お金^{かね}をあずけたりしているし、不安定^{ふあんてい}になる
- 対応^{たいおう}がわるい人^{ひと}はかわったほう^よが良い
- かわるならはやく^し知らせしてほしい
- もっと勉強^{べんきょう}してほしい



Ⅱ グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(4) 仲間との関係についてこう思う

助け合える人、でもマナーが大切

- ☐ 仲間の話を聞いてあげることができる
- ☐ できる人ができない人を手伝ってあげることができる
- ☐ こまったら相談できる
- ☐ 全く知らない人が、突然入居するのは困る
- ☐ となりの部屋の声や音が聞こえてしまうのが困る
- ☐ たがいに干渉されすぎるのは困る
- ☐ 行事や旅行など全員で行動するように言われるのは困る
- ☐ お風呂やトイレがたりなかったり、マナーが悪くてトラブルになることがある

解説

「グループホームのいいところ」「グループホームの困るところ」は、そうした話し合い中で出たたくさんの事柄のエッセンスです。入居者が一番問題にするのはグループホームの人間関係です。世話人は最も関係が深いだけに厳しい目を向けています。自分のことをわかって、きちんと向き合ってほしいと言っています。入居者同士の関係は予想以上に重い問題になっています。お互いに助け合うことが出来る関係をよろこび満足すると同時に、他人同士が生活を共有することから生ずる人間関係の複雑さ、同居者の聞き分けのなさやマナー違反などに苦しんでいます。

II

グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(5) 将来の暮らしについての希望と不安

暮らしがどう変わっても支援がほしい

- 一人暮らしや結婚したいと思っている人もいる。このままずっとグループホームで暮らしたいと思っている人もいる。年をとってもグループホームにいたい人もいる
- どういう場合も支援してほしい
- 一人暮らしや結婚しても、ヘルパーなど支援を十分にしてほしい



II

グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(5) 将来の暮らしについての希望と不安

いつでも相談にのってくれる人がほしい

- いつでも相談に乗ってくれる人のいる支援センターがほしい
- グループホームのことだけでなくなんでも相談でき、必要などところにつなげてくれるところや、人がほしい
- 第三者委員会のような相談できる場所・人がほしい

Ⅱ グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(5) 将来の暮らしについての希望と不安

じぶん

自分たちでグループホームをつくってみたい

○いつか^{ちいき}地域^{ひと}の人に^{てっだ}手伝ってもらって、
^{じぶんたち}自分達の暮らしやすいグループホーム
 をつくりたい



13

解説

ほとんどの入居者は言葉に表さなくても、自分の将来に不安を持っています。「今はとにかくこうして暮らしているけれど、生活が変わったとき自分はなるのだろうか？」それが「どうい場合も支援してほしい」という言葉に表れています。だから、グループホームのことでだけでなく、なんでも相談できる人や支援センター、第三者機関を切実に求めています。そして、いつか地域の人に手伝ってもらって自分たちの暮らしやすいグループホームをつくろうと願うのです。「地域の人に手伝ってもらって」という言葉は注目に値します。障害福祉の枠組みを超え、地域の人の手をかりて自分たちの生活を組み立てようとイメージするのです。

(6) いま私たちが切実に感じていること

支援者ともっと、もっと、もっと話したい

- 支援者ともっと話したい
- 担当が決まっていたり、相談支援センターがあっても、1対1でゆっくり話を聞いてもらったという実感がもてない。いつももっと話したいと思っている
 - 職員はローテーションで動いているので、話したい職員をつかまえるのがむずかしい
 - 職員は決まった仕事や事務仕事に追いまわられている
 - 他の入居者を気にせずおちついて話せる場所がない
 - わたしたちのことをちゃんと分かかってほしい

(6) いま私たちが切実に感じていること

自主的に暮らせないのは、入居者とスタッフ双方の問題

- 自主的に生活することについて
- グループホームは必要な支援をつかいながら、自主的に暮らすところだと思う。でも、必要な支援がなかったり、あわない支援や unnecessary 支援がされている場合がある。これは、入居者と職員双方の問題だと思う
 - 部屋に鍵がなくても気にしなかったり、部屋のそうじを世話人まかせにして平気なのはおかしい
 - お金のことは、人まかせにしないで、必要なら手伝わってもらいながら、分かておいたほうがよい

Ⅱ グループホームのいいところ、困るところをみんなに伝えたい

(6) いま私たちが切実に感じていること

まわりから特別の目で見られているように感じることもある

○自立的に生活することについて

- ・まわりから特別の目で見られているように感じることもある。差別されていると思う
- ・地域の人に偏見をもってほしくない
- ・地域住民として普通につき合いたい
- ・何かあったときに助け合える人のつながりが大切。一人ではなく、何人かほしい



解説

話し合う中で、入居者が日ごろ強く感じている3つの問題が浮き彫りになりました。一つは「支援者ともっと話したい」ということです。担当がいたり支援センターがあったり、形としては話し合いの機会が保障されていても、入居者は「十分話を聞いてもらっていない」という気持ちをいつも強く持っています。もう一つは支援のあり方と自立の問題です。重要なのは、支援のあり方を一方的に批判するのではなく、そういう支援をだまって受け入れているのは入居者の意識にも問題があると指摘している点です。入居者同士で気づいた点を指摘し合い相互に高めあってゆこうと積極的に仲間呼びかけています。もう一つは地域の人へのメッセージです。特別の目で見ないでほしい、地域の住民として互いに助け合い、普通に付き合いたいと呼びかけています。

Ⅲ

ひょうめん み はんたん 表面だけ見て判断しないで

グループホームの評価についての私たちの意見

- 表面的に判断するのではなく、どんなことを必要として
いるのか、入居者本人によく聞いてほしい
- 入居者の話を聞くとときは、他の入居者や職員のいない
おちつける場所がよい
- 入居者の許可なく勝手に部屋を見ないでほしい



Ⅲ

表面だけ見て判断しないで

グループホームの評価についての私たちの意見

き 聞くだけでなく、改善してほしい

- 入居者を批判したり指導しないでほしい
- 考えを押し付けるのではなく具体的にくわしく聞くこと
が大切
- 聞いたことなどを 他の人に話さないでほしい
- 話を聞くだけでなく、改善できることはしてほしい

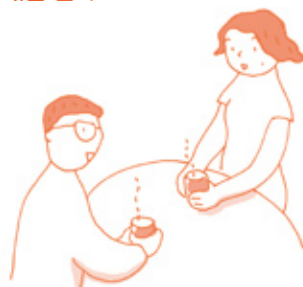
Ⅲ

表面だけ見て判断しないで

グループホームの評価についての私たちの意見

 ひょうかいいん なか にゅうきょしゃ
 評価委員の中には入居者も

- その後の報告は必ずしてほしい
こ ほうこく かなら
- 次のときもまた同じ人が来て、継続的に対応してほしい
つき おな ひと き けいぞくてき たいおう
- 評価委員には、グループホーム入居者や
ひょうかいいん にゅうきょしゃ
 元入居者も入っているとよい
もとにゅうきょしゃ はい



解 説

ここには第3者委員会などがグループホームの評価を行う際の具体的な注意事項がまとめられています。落ち着ける場所で入居者本人にゆっくり聞いてほしい。たとえ評価のためであっても入居者のプライバシーをきちんと守ってほしい。指導に来るのではない。などは評価者の守るべき基本ルールです。「評価の結果が実際にどう改善につながったかを知らせてほしい」というのは入居者ならではの要請です。形だけの評価は、例えそれがどんなに優れた評価基準を用いて行われたものであっても、入居者にとっては意味がありません。実際の暮らしの改善につながってこそ、評価が役に立つのです。評価委員の中に入居者を入れてほしいというのはまっとうな提案です。

Ⅳ

わたし 私たちがこれからやりたいこと

こま 困っている入居者を助けたい

- グループホームでのマナーについて考えたい。規則ではなく、社会で暮らしてゆくために必要な人への配慮について
- 困っているグループホーム入居者を助けたい。どこに住んでも良いくらいができるように、グループホーム評価についての私たちの考えをひろめたい
- 当事者のつながりが無い地域に、つながりをつくる手伝いをしたい

V

わたしたちの夢

- 当事者と支援者だけではなく、一般の人と一緒に、地域の生活をもっと楽しくするために活動したい
- だれでも気軽に集まれる食堂や居酒屋をつくりたい。障害のある人もない人も、楽しみながら自然な交流をしたい





解説

3年間の活動を終えるにあたり、入居者委員会はこれからの希望や夢を語り合いました。全体を通していえるのは、入居者が抱えるさまざまな困難にもかかわらず、他人に対する不満や非難ではなく、むしろ自分を省みながら、明るく建設的な意見が多く語られた点です。「社会で暮らしてゆくために必要な人への配慮」「どこに住んでもよい暮らしが出来るように困っているグループホーム入居者を助きたい」「地域ごとに助け合う体制をつくるため、地域に当事者のつながりを作る手助けをしたい」など、成熟した考えが表明されました。そして何よりの願いは、当事者と支援者だけでなく、地域の人と一緒に楽しく暮らせる地域をつくるために活動したいということです。

入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究

はじめに

障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会は、独立行政法人福祉医療機構（高齢者・障害者福祉基金）の助成を得て標記の研究を行いました。実際に研究を担ったのは本学会に設置されている入居者委員会です。入居者委員会はグループホームで暮らす知的障害当事者による委員会です。年度によって若干の違いがありますが、10名前後の入居者と、その活動をサポートする3,4名の支援者で構成されています。

1. この研究を行う意義

グループホームは入居者の家です。まわりから見てどんなに立派なグループホームでも、そこに住んでいる人自身が満足できなければ良いグループホームとはいえません。各地で行われるシンポジウムなどの発言を見ても、良いグループホームの基準は運営者、現場の援助者、家族、入居者などそれぞれの立場によってすいぶん違います。特に関係者と入居者の見解にはかなりの差が見られます。入居者はグループホームに何を望んでいるのでしょうか。どのようなグループホームを「住みやすい」ととらえ、又「住みにくい」と感じているのでしょうか。この問いに対する答えは入居者自身にしか出せません。

入所施設やグループホームなど居住の場の質を向上させる目的で一定の評価基準を作成し、複数の第三者が調査に入りその基準に沿って評価することが広く行われています。そうした評価が実際にそこに住んでいる人たちの「住みやすさ」「住みにくさ」に役立つものであるためには、評価の基準そのものが入居者の立場にたつものでなければなりません。グループホーム

をかけがえのない家として生活する入居者の感性和ニーズに基づくものでなければなりません。私たちが「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」をおこなう意義はここにあります。

2. 研究の基本姿勢

この研究の特色は入居者委員会が研究のすべてを担った点にあります。

知的障害者や知的障害支援にかかわる研究は数多く行われてきましたが、そうした研究のなかで、知的障害者はほとんどいつも研究の対象であり、研究の主体ではありません。ここ数年東京の「さくら会」や「札幌みんなの会」など当事者活動の中で、本人の手によるレクリエーションや就労に関する調査が行われていますが、これはごくまれなケースです。

知的障害者はその障害特性から「研究」という知的な仕事にはそぐわないと考えられてきたためです。グループホームに関する研究についても同様です。知的障害者のグループホーム先進地として全国的に知られた北海道伊達市には数多くの調査グループが入り、グループホームの現状と課題、そのあるべき姿などに関するたくさんの報告が出されています。しかしその研究手法は入居者や援助者にたいする研究者による「聞き取り」が中心です。

最近の研究としては、厚生労働省平成19年障害保健福祉推進事業として大阪府立大学准教授三田優子氏が長野県の地域移行者304名を対象に行った聞き取り調査があります。この調査は県内10地区（福祉圏域）のコーディネーターや生活支援ワーカーと、この研究の研究員合わせて44名による大がかりな聞き取り調査です。この調査の特徴は地域移行の当事者の「声」を出来るだけそのまま、しかも深いところから掘り起こすため周知な準備を行った点です。聞き取る際の入居者と聞き取り手の倫理性や関係性についての研修をすべての調査員が受けました。「いかに当事者の声に耳を傾けるか」を中心とした手引書が作成され活用されました。地域のコーディネーターなど日常的に相談支援業務にたずさわる人は、担当地域とは違う地域を調査するなど慎重な配慮のもとに聞き取り調査が実施され、地域移行の質にかかわる貴重なデータが収集されました。

私たちが「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」

を行うに当たり、上記のような慎重な準備をしたうえで関係者による「聞き取り」を行うことは一つの選択肢でした。しかし私たちは入居者自身が研究を行うことを選びました。それがこの研究にもっともふさわしいと考えたからです。

私たちがさまざまな場面で知的障害のある人と関わる中で気づくのは、知的障害者といわれる人たちが自分にとって切実な問題にたいして示す感性の鋭さとの確かさです。障害の程度や特性によって関心の及ぶ範囲はおのずから差があり、又人によってはその表現方法が独特のため、周りに伝わりにくいという問題は確かにあります。また、聞く側の能力の貧しさを棚に上げ、知的障害者の発言だから理解困難なのだと片付けられてしまうこともしばしばです。しかし、入居者の家であるグループホームに関する研究でもっとも尊重されなければならないのは、入居者自身の感性に基づいたニーズです。そしてその感性が損なわれることなくそのまま働くのは、入居者同士のピアな場、すなわち入居者委員会です。

研究は研究を担う者の見識や意識に大きく左右されます。特に社会福祉という人間存在のあり方そのものに関わる分野では、誰がこの研究を担うかが研究の質にかなり大きく影響します。こうしたことを考えるとき「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」は、入居者が行うのが最もふさわしいと私たちは考えました。入居者自身が研究を行うことが必要であり、支援さえあればそれは十分可能だというのが私たちの基本的な認識です。

第1章 入居者委員会による研究報告

入居者委員会は研究結果の報告のために、前出のパワーポイント「グループホームの評価をする人は入居者本人によく聞いてほしい」を作成しました。また、『「障害のある人が安心して自分らしい地域の生活を送れているか」当事者および第三者が確認するためのききとり表』を作成しました。こうした形で報告をまとめたのは、自分たちの研究結果を入居者や世話人などグループ

ホーム関係者またさらに広く社会の人たちに伝え、理解してもらうことが重要だと思ったからです。また、このスライドを材料にして入居者や関係者が自主的にグループホームについての勉強会を開いてほしいと願ったからです。

第2章 支援者からの研究報告

以下の報告は入居者委員会の研究活動をサポートした複数の支援者の見解をまとめたものです。

一口にサポートといってもその内容は多岐にわたりました。会議場の予約、委員への連絡、移動支援、訪問先との調整、会議記録の作成配付などのほか、委員間の人間関係の調整、議事進行の手伝い、まとめの支援、報告書作成の支援などを行いました。研究は3年にわたりましたが、はじめのうちは委員間の関係がギクシャクしたり、発言力の差が目立つなど困難な問題がありました。しかし経験を重ねる中で委員はそれぞれに考える力を高め、聞くこと・話すことに習熟し、テーマに集中して討議を深めることが出来るようになりました。そうした経過の中で入居者委員会は自分たちにふさわしい形で研究を続け、当事者だからこそ可能な考察を導き出したと私たちは考えます。そうした考察を入居者が自分の言葉でまとめたのが、「グループホームの評価をする人は入居者本人によく聞いてほしい」です。

1. 研究テーマの確認

…入居者委員会にとっての目標の設定

「入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究」というテーマは、学会が設定したものですが、入居者自身が発想したものではありません。従って、入居者がこの研究に主体的に取り組むためには、このテーマを自分たちの言葉で言い換え、自分たちにとっての目標を確認することが必要でした。

このテーマが最初に示されたとき、入居者の反応はむしろ拒否的でした。

①私たちは他のグループホームを訪問するチャンスがほとんどない。グループホームの現状や課題がわからないまま、グループホームの評価基準の研究などできるわけがない。

②私たちにとってグループホームは住居である。評価の結果がどうであろうと、簡単に住み変えられるものではない。自分たちにあまり意味のあることとは思えない。それに、自分たちがグループホームについてあれこれ言うことは、そこに住めなくなる危険につながる。

こうした二つの意見は、現在入居者が置かれている状況をよく表しています。ほとんどの入居者は互いに切り離され、自分たちの生活を比較検討する機会も手段も持っていないのです。また、入居者にとってグループホームは自由に選んだり出入りできるところではありません。そこを失うことは生活基盤の崩壊にもつながります。そういう場所を評価するなど恐ろしくて出来ないというのは正直な実感だったでしょう。こうした問題のとらえ方は、入居者だからこそできるものであり、グループホームのあり方に対する鋭い問題提起です。

討論はそこから出発しました。話し合いを重ねた結果入居者委員会は研究の目的を次のようにまとめました。

- ①グループホームにとって大切なことを入居者の立場から明らかにする
- ②この研究を通して、暮らしやすいグループホームを全国にふやしてゆく

2. 研究の方法

こうした目標を達成するため、入居者委員会はつぎのような活動計画を立てました。

- ①各地のグループホームを訪問し入居者と話し合う
- ②訪問するグループホームだけでなくその地域で暮らす多くの仲間と交流し、話し合う。それを通してグループホームについての感想や意見をたくさん集める
- ③年度の終わりに訪問した地域の入居者代表を招き、問題を深める
- ④わかったことを自分たちの言葉でまとめ、それを伝えるためのスライドを作る
- ⑤学会その他の場で発表して自分たちの考えを多くの人に知らせ、よいグ

ループホームを増やすことに役立てる

3. 研究の実施

上記に沿って行った活動の実際は 8 頁のスライドの通りです。

4. 研究結果の考察

研究結果について以下の二つの観点から考察します。

- (1) 当事者(障害当事者であり同時にグループホームに入居している当事者)が研究したことの意味
- (2) グループホーム評価基準の作成についての当事者からの提言の意味

(1) 当事者が研究したことの意味

イ. ピアな関係で聞き取りと話し合いを行ったことの意味

最初の調査地札幌を訪問するに当たり、入居者委員会は「あなたの暮らしについて教えてください」という入居者対象のアンケートを行いました。内容は解説末尾をごらんください。

回答結果は予想に反し8割の人が「とてもよい」「まあまあよい」と肯定的な答えを寄せました。この結果について入居者委員は「地元の援助者の手を借りて配布と回収を行ったので、本音が聞けなかった」と分析しました。実態はどうであったよくわかりません。他にも理由はあるでしょう。例えば、自分の生活について比較対象をもち、本気で考えたり、よりよい生活をイメージする経験が乏しかったなどが考えられます。しかし、入居者委員会はこの段階でアンケートをとるという手法をすて、もっぱら直接対面して話を聞き、質問や意見交換を交えながら問題を深めるやり方に切り替えました。そして話し合いの席に日常生活の援助者や以前いた入所施設の職員などが同席することを極力排除しました。自分たち同士で話し合う際に、援助者の影響からできるだけ自由でありたいというこの感覚は、この研究のすべての場面で一貫して見られました。

アンケートという方法で意見を集めそれを統計的に処理し、その結

果に考察を加えるのは研究の常道であり、説得力を持っています。しかし入居者委員会がその手法をとらなかったのは、この研究に関しては、正しい判断だったといえます。彼らは「本音」を集めたかったのです。そして入居者が援助者のまえでは容易に本音を出さないことを、同じ立場にいる彼らはよく知っていたのです。

ロ. グループホームの範囲を超えて、自分や仲間の生活や生き方について考えようとしたことの意味

入居者委員会の研究姿勢には一つの特徴がありました。それは彼らの視点が常にグループホームの評価の範囲を超え、自分や仲間の生活、さらに生き方全体に及んでいたことです。研究支援を行う中で支援者は彼らの関心を研究テーマ「グループホームの評価基準」に戻そうと努力しました。今回の研究テーマを何度も説明し、研究助成を受けているのだから、的確な結果を出すことが必要だと強調しました。しかし、彼らは自分たちの暮らし全体について考える姿勢を崩しませんでした。

実は、これは当然のことだったのです。まわりから見れば、グループホームは制度上の一つの単位であり、それだけを取り出して秤にかけ、スケールを当てることによってその質を云々することのできる個別の客体です。しかし入居者にとってグループホームは自分の生活の一部です。生活は切れ切れのパーツをつなぎ合わせたものではなく、仕事や友人、家族や職場の人とのつながり、カルチャー活動など、人を取り巻くさまざまなはたらきの有機的な総合体なのです。したがって彼らが生活の拠点であるグループホームについて考えるとき、制度や場としてのグループホームの枠を超えて、自分の生活そのものを語るのは当然のことです。「大切なのはどれだけ地域で暮らせているかということだ」という入居者委員の言葉は、客観性を重視するあまり硬直化しかねない評価基準の意味を当事者の立場から問い直すものです。

ハ. 研究活動をおこなう過程で入居者のエンパワーメントが行われたことの意味

支援者からの研究報告の冒頭で述べたように、研究活動に携わった入居者委員は、それぞれのスタイルではありましたが表現力、思考力、集中力、自制力などを高め、他の人と協同して作業することの楽しさと難しさを理解しました。そして自分の暮らしについて考えを深め、仲間のよりよい生活の役に立ちたいという気持ちが強くなりました。また、入居者委員の訪問が刺激になり、訪問した地域にグループホームについて考える会ができたり（因島）、情報の重要性に気づき勉強への意識が高まる（群馬ほか）など、訪問先にもよい影響を残しました。電話をかけ、手紙を出す遠方の友人ができ、生活の幅が広がり楽しみが増えました。そして「与えられた暮らしをするだけでなく、もっと自分から提案してゆきたい」、「いつか地域の人に手伝ってもらって、自分たちが暮らしやすいグループホームをつくってみたい」と、積極的に明るい希望を述べるようになりました。これらは研究の対象者である場合には決して起こりえない前向きな変化です。

（２）グループホームの評価基準の作成についての入居者委員会の提言の意味

入居者委員会はグループホームの評価基準を作成したわけではありません。しかし、自分たちがグループホームに暮らす中で何が重要かを明らかにし、また自分たちが今切実に感じていることを率直に伝えることによって、評価基準を作成する際に役立つ重要なヒントを提供しました。その上に立って、自分たちが望むグループホームの評価のあり方について具体的な提言を行いました。それらは「研究の結果わかったこと、みんなに伝えたいこと」「私たちは将来の暮らしについてこんな希望や不安を持っている」「いま私たちが切実に感じていること」などのスライドにまとめられています。

ここに述べられているのは、入居者委員会が各地の入居者からじかに聞き取り討議した事柄のいわばミニマムエッセンスです。自分たちの言葉で簡潔に述べられているのであえて再掲はしませんが、支援者の立場から特に重要と思われる点に触れます。

イ. グループホームの入居者が一番問題にするのは人との関係

- 困ったとき相談に乗ってくれる人がある
- 人がいる安心感がある
- 少人数で暮らせる
- 入居者同士で助け合うことができる
- 世話人と関係をつくるのは時間がかかる
- なれたころやめるのは困る
- 入居者同士のトラブルがある
- マナーを守れない人がある
- 相談できる人がいない
- 干渉されすぎるのは困る
- 一緒に行動をとるよう強制されるのは困る

上記を見てわかるとおり、グループホーム入居者にとって大切なのは人のつながりです。建物や設備もさることながら、人との関係のなかで悩んだり、安心したりしています。これは人にとってごく当たり前のことですが、グループホームの評価を行う際にも、最も重要視されなければならない点です。

ロ. 入居者は援助者ともっと話したいと思っている

ホームの世話人のほかに支援センターも整備され、形の上では入居者の声を受け止める体制がきちんと出来ているように見えても、入居者はいつも十分話し合えない飢餓感を抱えています。もっと話し合い自分のことを理解してもらいたいと切望しています。入居者同士のピアな関係の中で初めて出てきたこうした内面の問題を、評価のなかで拾い上げるのはなかなか難しいことです。けれども入居者からいえば、表面的な評価は自分たちにとって意味がないのです。

ハ. 援助者の過保護とそれに寄りかかった甘えは、自立を妨げる

「援助者が入居者の意思を確かめずに何でもやってしまうことは、入

所者の自立を妨げる。こうした関係をつくり出すのは、双方の問題である」と、入居者委員会は指摘しています。「部屋に鍵がなかったり、世話人がだまって自室の掃除をしても平気であるのはおかしい、入居者がもっと自覚的であることが必要だ」というのです。彼らはこうした入居者の意識を敏感に察知し、グループホームの質の問題として鋭く指摘しています。こうした視点はグループホームの評価のなかに当然盛り込まれるべきものでしょう。

二. 地域の住民として普通につき合いたい

「まわりから特別の目で見られていると感じることがある。差別されていると思う」、「地域の人に偏見を持ってほしくない」と入居者は言っています。その上で「自分たちは一人の住民として地域の人と普通につき合いたい。何かあったときは互いに助けあえる人が複数ほしい」と望んでいます。グループホームは障害者支援制度です。それをわかった上で、でも特別の目で見ないでほしい、普通に付き合いたいという彼らの本音を、地域の人もグループホーム関係者も受け止める必要があります。

ホ. グループホームの評価についての入居者委員会の提言（意見）

研究のまとめとして入居者委員会が提出したグループホームの評価に対する意見は大変具体的で、しかも示唆に富んでいます。

- グループホームを表面的に判断するのではなく、どんなことを必要としているかを、他の入居者や職員のいない落ち着いたところで、入居者本人によくきいてほしい
- 入居者を批判したり指導したり考えを押し付けたりしないで、具体的に詳しく聞いてほしい。評価をする目的であっても入居者の許可なく部屋を見ないでほしい。聞いたことを他の人に漏らさないでほしい…これらは評価者の基本倫理です
- できることは改善してほしい。その後の報告は必ずほしい…当事者にとって生活の改善につながらない評価は価値がないのです。

- 次のときも同じ人がきて継続的に取り組んでほしい…改善が積みあがることを求めています。

そして彼らは「評価委員にはグループホーム入居者や元入居者も入っているとよい」と結んでいます。この研究の中で一貫して重要視されてきた当事者性の問題です。グループホームの評価には当事者の感覚に裏打ちされた当事者の目が必須なのです。そのためには、実際に評価メンバーの中に当事者を入れる必要があります。もちろん一定のトレーニングは必要です。けれどもこれは他の評価メンバーにとっても同様です。

おわりに

3年間にわたる入居者委員による研究は、知的障害のある人が構成する委員会としての制約のほか、条件の悪い中で働く人たちであったため休日が合わず会議が開きにくい、日によって調子の波があるなど、いくつかの困難をかかえていました。しかしこの研究が当事者だからこそ得られたいいくつかの成果を上げられたことは、これまで見てきたとおりです。

不十分な点としては、例えシンプルなものであっても、実際に使える評価表のモデルを示すところまで到達出来なかった点です。しかし、そのことは、「できなかった」ということもできますが、入居者委員は「そうしなくなかった」のだ、と言うこともできます。客観的に「評価基準や評価表をつくり、それを使って評価しようとする」第三者的発想、姿勢自体への異議申し立てでもあったと受け止めることの意味は大きいでしょう。もちろんそれは、今後当事者自身の取り組みの中から「評価基準」が作成されるならば、その意義を否定するものではありません。むしろ、本当に当事者が必要とするならば、それは必要な支援を得ながら、常に、着実に、目指されるでしょう。

入居者委員会は、前出の「ききとり表」を活用しながら、必要があればさらに改善しつつ、実際に評価活動（本人の話をよく聞いて、本人の役に立

つ活動）を行いたいと望んでいます。

最後に入居者委員会が報告書のなかで語った言葉を再掲し、この報告を終わります。

困っているグループホーム入居者を助けたい。どこに住んでもよい暮らしができるように、グループホーム評価についての私たちの考えをひろめたい

当事者と支援者だけでなく一般の人と一緒に、地域の生活をもっと楽しくするために活動したい



あなたのグループホームでの暮らしについて教えてください!

1から5までの質問を読み、四角の中の①から④の中から、あてはまる答えを選んで○をつけてください。

1. 世話人や職員との関係はどうですか?

- | | |
|-----------|----------|
| ① とてもよい | ② まあまあよい |
| ③ あまりよくない | ④ よくない |

2. あなたが住んでいるグループホームは きにいらっていますか?

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ① とても きにいらっている | ② まあまあ きにいらっている |
| ③ あまり きにいらっていない | ④ きにいらっていない |

3. あなたが住んでいるグループホームでの仲間との関係はどうですか?

- | | |
|-----------|----------|
| ① とてもよい | ② まあまあよい |
| ③ あまりよくない | ④ よくない |

4. 毎日の食事はどうですか?

- | | |
|-----------|----------|
| ① とてもよい | ② まあまあよい |
| ③ あまりよくない | ④ よくない |

5. 自分の部屋はきにいらっていますか?

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ① とても きにいらっている | ② まあまあ きにいらっている |
| ③ あまり きにいらっていない | ④ きにいらっていない |

あなたのグループホームでの
暮らしについて教えてください!



6と7の質問を読み、四角の中の①から②までの中から、あてはまる答えを選んで○をつけてください。

6. ともだちはいますか

① いる

② いない

7. こまった時に相談できる人はいますか

① いる

② いない

8と9の質問を読み、四角の中の①から②までのうち、あてはまる答えを選んで○をつけてください。答えが①の場合、1ヵ月に何回使っているかも記入してください。

8. ガイドヘルパーを使っていますか

① つかっている

② つかっていない

1ヵ月に何回使っていますか

かい
回

9. ホームヘルパーを使っていますか

① つかっている

② つかっていない

1ヵ月に何回使っていますか

かい
回

あなたのグループホームでの
暮らしについて教えてください!



10 から 13 まで、質問を読んで、四角の中に答えを書いてください。

10. 仕事は何をしていますか

11. 休みの日は何をしていますか

12. こづかい（自分の好きなことに使えるお金）は 1 カ月にいくら
ですか

えん
円

13. グループホームには 1 カ月にいくら払っていますか

えん
円

障害のある人が、安心して、自分らしい地域での生活を送れているか

当事者および第三者が確認するためのききとり表

	問いかけ・質問のしかた	聞くときに大事な視点・ポイント
1	グループホームでの生活は好きですか？ 楽しいですか？	
2	あなたは今、困っていることや不安なことはありますか？	
3	悩みをきいてもらったり、相談できる人はいますか？	・世話人や家族以外に、信頼できる援助者はいるか？ ・複数の支援者が関わり、本人が話す人を選ぶ状態か？ ・友人など、人間関係の広がりをもてているか？
4	世話人（グループホームの職員）はあなたの話をよく聞いてくれますか？	・自分のことをよくわかっていてくれていると感じられているか ・話したいのがまんさせられていないか ・ホームで大事にされていると感じているか？
5	他の入居者との関係はどうですか？	・団体での行事や旅行などを負担に感じていないか？ ・適切な距離を保てているか？ ・問題がおきた時は、世話人がきちんと対応してくれるか？
6	自分の部屋は気に入ってますか？ 過ごしやすいですか？	・ゆっくりできるか ・カギはついているか ・好きなことができるか ・勝手に入られたりしないか ・広さや音もれなどはどうか
7	ホームでの食事はどうですか？ 好きですか？	・食事の内容以外にも、食事の仕方（みんなで食べる、それぞれ食べる）は嫌ではないか？ ・外食や買ってきて食べるなどの自由はあるか？
8	あなたのお金はどのくらいたまっているか 知っていますか？ グループホームには毎月いくら払っていますか？	・管理の方法や使い方など、本人が自分のお金だという意識をもてるように説明されているか？
9	自由に外出したり、友達に会いに行ったり できますか？	・門限はあるか、ある場合には不満を持っていないか ・休日などの行動範囲が限定されていないか
10	グループホームの近所に住んでいる人や 近くのお店などに知り合いはいますか？	・本人なりの地域とのつながりができているか ・地域で本人の存在が認知されているか
11	あなたの住んでいる町は住みやすいですか？	・交通の便、遊ぶ場所、銀行などについて不満はないか？ ・コンビニやスーパーはありますか？
12	これからの希望、やってみたいことなどは ありますか？	・それを聞いて、それに向けて支援してくれる人はいるか？

平成 20 年度独立行政法人福祉医療機構助成事業 「地域基盤型グループホーム支援方策推進事業」

- 発行日 平成 21 年 3 月 31 日
- 発行者 障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会
代表 室津滋樹
- 事務局 白梅学園大学堀江研究室気付
東京都小平市小川町 1-830
FAX 042-344-1889
<http://www.gh-gakkai.com>
Mail: info-gh-gakkai@shiraume.ac.jp